

2022年度

事業報告書



Meitoku
since 1925

学校法人千葉明德学園

目 次

I. 法人の概要 -----	1
1. 法人の名称-----	1
2. 事業所の所在地-----	1
3. 建学の精神-----	1
4. 法人の沿革-----	1
5. 設置する学校-----	2
6. 附帯事業-----	2
7. 姉妹法人-----	2
8. 役員-----	2
9. 教職員の状況-----	3
10. 土地及び建物の状況-----	3
11. 学生・生徒・園児の数-----	4
II. 事業の概要 -----	5
1. 学園全体の状況-----	5
2. 法人事務局-----	5
3. 千葉明德短期大学-----	6
4. 千葉明德高等学校-----	9
5. 千葉明德中学校-----	12
6. 千葉明德短期大学附属幼稚園-----	15
7. 明德本八幡駅保育園-----	17
8. 明德浜野駅保育園-----	18
9. 明德やちまたこども園-----	20
III. 財務の状況 -----	22
1. 事業活動収支の推移-----	22
2. 施設設備への投資額の推移-----	23
3. 借入金の推移-----	23

I. 法人の概要

1. 法人の名称

学校法人千葉明德学園

2. 事務所の所在地

千葉県千葉市中央区南生実町1-4-12番地

電話番号 : 043-265-1611

FAX番号 : 043-265-1651

URL : <https://www.chibameitoku.ac.jp>

3. 建学の精神

「明明徳於天下者先致其知」

明德を天下に明らかにせんとする者は、先づその知を致せ。

法人名及び開設する全ての学校、施設名に用いられている「明德」は、中国の古典「大学」の一部にある「明明徳於天下者先致其知」（明德を天下に明らかにせんとする者は、先づ其の知を致せ。）を引用したものである。「明德」の由来は、約2000年昔の中国の古典「大学」にある。「大学」といっても高校を卒業してから行く大学のことではなく、「小学」に対する「大学」の意味である。「小学」とは「小さな学問」、いわゆる、よみ・かき・そろばんといった個人が生きていくために必要な身の回りの基礎的な学問で、一方、大学は小学よりもっとレベルの高い大きな学問で、自分が生きるためではなく世のため人のためになる学問を意味する。「大学」には、大学を究めるためにはどうしたらよいかのかが次のように書かれている。

「大学の道は明德を明らかにするにあり」

「明德」とは人が天から得たすぐれた能力、人間として生まれながらに持っている人間性であり、明德を明らかにする、とはそれを輝かせる、ということであり、それが本学園の使命である。

4. 法人の沿革

1925年 1月 千葉淑徳高等女学校 設立 創立者 福中儀之助 初代校長に就任
(千葉市登戸町3丁目)

4月 開校式 举行 (定員600名)

1943年 7月 財団法人千葉淑徳高等女学校となる

1947年 5月 学制改革により千葉明德高等学校・同中学校に改組

1951年 1月 学校法人化し、学校法人千葉明德学園となる

1963年 4月 高校男子部の新設

1964年10月	千葉市中央区南生実町へ全校移転
1966年 5月	体育館 竣工
1967年 5月	千葉明德学園幼稚園 設置認可
1970年 1月	千葉明德短期大学 設置認可
	4月 千葉明德短期大学 開学
1972年 4月	千葉明德中学校最終卒業生高校進学 以後休校 千葉明德学園幼稚園から千葉明德短期大学附属幼稚園に改称
1974年 4月	高校 男女共学となる
1992年 7月	現理事長 福中儀明 理事長就任
2003年10月	明德本八幡駅保育園 開園
2006年 4月	社会福祉法人千葉明德会 設立 明德土気保育園 開園
2010年 4月	明德浜野駅保育園 開園
2011年 4月	千葉明德中学校 開校
2012年 3月	千葉市と「避難所施設利用に関する協定」締結
2013年 4月	社会福祉法人千葉明德会 明德そでの保育園 開園
2015年 3月	学校法人北総学園と合併
	4月 明德やちまたこども園 開園
2018年 4月	千葉明德短期大学附属幼稚園 幼稚園型認定こども園に移行
2020年 4月	社会福祉法人千葉明德会 明德土気保育園 幼保連携型認定こども園 明德土気こども園に移行

5. 設置する学校

- (1) 千葉明德短期大学 保育創造学科
- (2) 千葉明德高等学校 全日制課程普通科
- (3) 千葉明德中学校
- (4) 認定こども園千葉明德短期大学附属幼稚園
- (5) 明德やちまたこども園

6. 附帯事業

- (1) 明德本八幡駅保育園（第二種社会福祉事業）
- (2) 明德浜野駅保育園（第二種社会福祉事業）

7. 姉妹法人

社会福祉法人千葉明德会（明德土気こども園・明德そでの保育園を運営）

8. 役員（2023年3月31日現在）

理事長 福中 儀明
副理事長 鈴木 総美

理事 由田 新（千葉明德短期大学学長）
 理事 園部 茂（千葉明德中学校・高等学校校長）
 理事 北村 都美子
 理事 木原 稔（事業開発室長）
 理事 高浦 芳一（内部監査室長）
 監事 荒木 由光
 監事 神子 信行

9. 教職員の状況（専任教職員数及び平均年齢）（2023年3月31日現在）

	人員数	平均年齢
短期大学教員	16	48.0
高等学校教員	55	42.4
中学校教員	18	39.0
幼稚園教員	21	35.4
本八幡駅保育園	9	40.9
浜野駅保育園	8	39.9
やちまたこども園	15	35.1
事務職員	27	44.3
合計	169	41.2

（注）役員（理事）は除く

10. 土地及び建物の状況

（1）土地の状況（2023年3月31日現在）

（㎡）

	法人	千葉明德 短期大学	千葉明德中学校・ 高等学校	千葉明德短期 大学附属幼稚園	やちまた こども園	合計
校地	0	13,005	67,975	4,550	2,871	88,401
その他の土地	472	0	62,752	0	0	63,224
合計	472	13,005	130,727	4,550	2,871	151,625

（2）建物の状況（2023年3月31日現在）

（㎡）

	法人	千葉明德 短期大学	千葉明德中学校・ 高等学校	千葉明德短期 大学附属幼稚園	やちまた こども園	合計
校舎	0	3,844	12,016	1,712	705	18,277
附属施設	0	0	3,419	0	0	3,419
その他の建物	0	10	48	0	0	58
合計	0	3,854	15,483	1,712	705	21,754

1 1. 学生・生徒・園児の数

(2022年5月1日現在)

部門	入学定員	収容定員	学生・生徒・園児数		
千葉明德短期大学	120名	240名	254名	1年	123名
				2年	131名
千葉明德高等学校	400名	1,200名	998名	1年	389名
				2年	315名
				3年	294名
千葉明德中学校	120名	360名	220名	1年	91名
				2年	60名
				3年	69名
千葉明德短期大学 附属幼稚園	(1歳児) 15名	315名	282名	1歳児	15名
	(2歳児) 15名			2歳児	15名
	(3歳児) 95名			3歳児	90名
	(4歳児) 95名			4歳児	89名
	(5歳児) 95名			5歳児	73名
明德本八幡駅保育園		45名	40名	0歳児	6名
				1歳児	18名
				2歳児	16名
明德浜野駅保育園		36名	39名	0歳児	6名
				1歳児	8名
				2歳児	6名
				3歳児	5名
				4歳児	8名
				5歳児	6名
明德やちまた こども園		75名	78名	0歳児	6名
				1歳児	8名
				2歳児	11名
				3歳児	17名
				4歳児	17名
				5歳児	19名

II. 事業の概要

1. 学園全体の状況

2022年度の学園財政の状況は、事業活動収入25億8,645万1千円に対し、事業活動支出24億9,974万7千円、基本金組入前当年度収支差額は、8,670万円の収入超過となり、2012年度から11期連続で収入超過となった。(詳細「III. 財務の概要」参照)

ただし、少子化やライフスタイルの変更等、社会的要因による影響を受け、減少傾向が見られる部門もある。募集改善に向けて様々な施策を検討・実施し更なる経営改善を図っていききたい。

2023年度募集(2022年度に行った募集活動)について、各部門に目を向けると、短期大学は、高校生の保育士志望者減少という要因によって入学者93名に留まり、定員を大きく割ってしまった。高等学校、中学校については、大学合格実績の向上、来校型体験イベントを積極的に実施した結果、高い水準で入学者数を保つことが出来た。(高校入学者394名、中学校入学者84名)認定こども園千葉明德短期大学附属幼稚園については、短大教員との連携による保育の質向上、コロナ禍においても安全・安心に十分に配慮した来園型イベントを継続するとともに、園情報をホームページにて積極的に広報し、昨年度同様の募集活動を展開したものの、1号認定(3歳)新入園児は63名に留まった。(昨年対比-12)一方で2号認定(3歳)は増加しており、今後、1、2号の定員配分の見直しも検討していききたい。

明德本八幡駅保育園については、年間を通して定員割れを起こす状況となり、2023年度以降は幼児クラスを増設し定員充足、安定した経営を目指す。明德浜野駅保育園、明德やちまたこども園については、昨年度同様、定員を超える数の園児を確保できた。保育事業各園は、運営方針、保育並びに教育目標に基づき安定した運営が出来、教職員のきめ細やかな対応や時間を掛けて計画した行事や取り組み等を通して、地域に根ざした園になっている。

2. 法人事務局

(1) 財政健全化に向けた短期借入金の返済

残額があった短期借入金について、好調な学生・生徒・園児募集とコロナ禍での支出削減の結果、2022年度、2億1千万円返済し完済に至った。(詳細「III. 財務の概要」参照)

(2) 施設・設備の整備

計画していた以下の施設・設備整備を予定通り実施し、教育環境の充実を図った。(詳細「III. 財務の概要」参照)

・短期大学 本館、2号館空調更新工事 3,520万円

- ・短期大学地下貯水槽地上化工事 4, 620万円
- ・高等学校 1号館南面サッシ交換・外壁改修工事 10, 648万円
- ・高等学校 ハンドボールコート 人工芝張替工事等 1, 309万円

(3) 第2グラウンド用地の整備

関係土地の買い取りについては、関係地権者との協議での合意を得て、2022年度末に該当地の一部約5ha（実測）を売買契約（売買価格1億4,456万4千円）により取得した。引き続き残地の買い取りに取り組んでいく。

整備着工については、整備計画のうち一部調整池の変更を行うため、関係法令に基づく変更許可手続きの見通しを踏まえて、改めて検討することとしている。

また、その諸準備の一環として、2021年度から実施してきた埋蔵文化財調査は、2022年度の2箇所をもって終了した。

(4) 創立100周年記念事業

2025年に迎える学園創立100周年記念事業の主たる事業をバリアフリー化及びグリーン化とし、その他式典開催や記念冊子作成等の事業を含めて実務を担う実行委員会を立ち上げた。

3. 千葉明德短期大学

2022年度はコロナ禍が続く中ではあったが、少しずつ以前の状況を取り戻す一年となった。ここ数年、比較的安定していた募集については、保育系への希望者の減少、他校との競争の激化の中で大変厳しさを増し、2023年度入学者は30名近くの減となった。

(1) 学生支援

①教育と保育実践の連携

“総合保育創造組織”としての認定こども園千葉明德短期大学附属幼稚園、明德本八幡駅保育園、明德浜野駅保育園、明德やちまたこども園及び系列の明德土気こども園、明德そでの保育園とは、本学学生の実習先としてはもちろん、ボランティア、有償研修（アルバイト）等、様々な形で関わり、学生たちは学びを深めている。また、学生の就職先という観点から本学内での説明会を行い、ともに学び続ける保育創造組織の仲間の育成についても連携を深めてきた。

また、授業でも、コロナ禍以前のように、保育を学ぶフィールド先として、系列園へ入る機会が少しずつ増えた。

同じ敷地内にある附属幼稚園については、本学の明石教授が園長を兼務して3年目となり、短大との連携を強めており、昨年度に引き続き、園内研修に短大教員が参加する等、連携して保育の質向上を目指す取り組みが行われた。

②教育課程での取り組み

本学の学びの原点である「体験から学ぶ」「学び合う」を実現するとともに、

個々の学生に対する支援の充実が本学の教育の中心である。コロナ禍以前と全く同様というわけにはいかないが、基本的に対面授業を、必要に応じてオンライン授業を活用するという形で1年間行うことができた。実習に関しては、幼稚園での実習は6月と10月の2回に分けての実施となったが、保育所実習ともども概ね終えることができた。しかし、施設実習に関しては、演習対応となる学生が出た。

「体験から学ぶ」大切な機会である「フィールドワーク」については、コロナ禍以降、宿泊を伴うコースを実施していなかったが、2022年度は、国内の2コース「わくわく富山」「わくわく遠野」を実施することができた。またゼミでも宿泊を伴う活動を行うコースもあった。

授業実践については以前の状況をだいぶ取り戻したが、学校生活については、授業終了後帰宅する学生が多く、サークル活動等が活性化することはなかった。学園祭は8月に実施することはできず、秋に附属幼稚園の子どもたちを主な対象として規模を縮小して行った。2年生の有志が企画し学年末に実施したスポーツ大会が、学園祭以外の数少ない学生企画の活動であった。「学校生活が楽しい」という状況を改めて作り出したい。

I C Tについては、教授内容によつてのオンライン授業の活用、授業内でのグーグルクラスルームの機能の活用等、必要に応じて活用する教員が増えた。

このような状況の中で退学者は、1学年は5名、2学年は4名と増加した。それに加えて、学費未納による除籍者が1学年1名、2学年2名と少なくともはなかった。様々な就学支援があるにも関わらず、厳しい経済状況におかれている学生がいるのも現実である。

就職に関しては、依然好調であり、就職決定率は100%を達成することができた。公務員（公立保育所）試験については、受験者10名、1次合格者8名、2次合格者5名と昨年度より増加した。また、科目等履修生の中からも2名合格者が出た。公務員講座等の取り組みが生きていると考えられる。

また、昨年度は幼稚園・こども園への就職が増加したが、今年度はさらに増加し30%を超え、近年にない数の卒業生が幼稚園・こども園へ就職した。

昨年度と同様、今年度も卒業はしたが免許・資格の取得ができなかった者が少なくはなく、そのほとんどは次年度に科目等履修生として、自身の課題と向き合い、必要な単位の修得を目指すこととなった。今年度は授業に関してコロナの影響は少なく、昨年度要因としたオンライン授業のためとは言い難く、科目等履修生の増加については、改めて分析が必要である。

今年度は、昨年度から始まった新しい教育課程のもとで、初めての卒業生となった。新課程の検証・評価はこれからになる。

コロナ禍が続く中、学生の傾向として、全国的に言われているように「学ぶ

意欲」が低下気味な姿が見られた。学業のみならず、様々なことを面白がる姿勢を作り出すことがなかなか難しく、受け身になりがちであった。様々なことを面白がる姿勢は保育者として大切な資質であり、改めて学生たちに面白がる、楽しむ気持ちを醸成する必要があると考えられる。

③教育課程外の取り組みの充実

2022年度もこども臨床研究所を中心に、様々な活動に取り組んできた。卒業生支援として、コロナ禍でオンライン中心の学習が続いた2021年度卒業生に対して、不安を解消するために学校へ集まる機会を月1回程度設けた。当初こそ、参加する学生がいたが、後期に向かって参加者は減少していった。同期の仲間や教員と話をしたい学生は一定数おり、特に4～5月の時期に関しては、その意味は十分ある。

卒業生を中心とした研修会「保育実践研修会」も3ヶ月に1回のペースで開催することができた。

「あそぼうかぁー」については、月1回程度で、附属幼稚園、明德やちまたこども園で活動した。しかし、外部の園へは行くことはできなかった。

「公開講座 めいトーク」は、7月に「保育の質の向上を考える～明德土気こども園の実践を通して～」と題し、コロナ禍以前と同様の形で開催することができた。参加者は55名であった。

子育て支援事業である「たいむ」については、週2回、1回5組と参加者数を限定したが、通年で実施することができた。ちば産学官連携プラットフォーム事業の「子ども子育て支援連携ワーキンググループ」の活動も継続して行った。

このように本学が対外的に行っていた様々な事業も少しずつ元の形を取り戻してきた。

また、千葉市と千葉市内の三短大（千葉経済大学短期大学部、植草学園短期大学、本学）で運営しているNPO法人「千葉市保育者研修センターMANABI」の事業に講師を派遣し、以下の研修を行った。

- ・「千葉市子育て支援員研修」の「基礎研修」と「現任研修」
- ・「潜在保育士研修」、「キャリアアップ研修」

(2) 教育環境の整備

ICT推進の中、未設置であった教室にプロジェクター等の設置を行い、全ての教室でパソコンを用いた授業が可能となった。学内のネット環境もより高速なものとなり、ICT推進のための環境は整った。

教務システム、就業のためのオンライン求人システムの導入については、検討事項として残った。

(3) 学生募集

2020年度から募集定員を120名に変更し、それ以降3年連続で定員を確保してきた。しかし、2023年度募集に関しては、前年までと同様の募集を展開してきたものの定員を大幅に割り込み、入学者93名となった。大手入試業者の分析によると、首都圏における保育系の短大・四大志願者は、2019年度から半減しているという。そのような中で、募集も大変厳しい状況となった。コロナ禍もあり、高校からの学校説明会への参加要望が少なかったことも負の要因と考えられる。

単に本学の募集の問題だけではなく、「保育」という仕事の魅力を発信していくことが求められる。

(4) まとめ

2022年度もまた新型コロナウイルス感染問題の影響が大きい1年であったが、教育実践に関しては、少しずつ平常を取り戻すことのできた1年であった。最低限本学の学びの原点である「体験から学ぶ」「学び合う」の実現を図ることはできたと考える。どのような状況にあっても、一人ひとりの学生に対して丁寧な支援を実践することは変わらない。その結果として、就職決定率100%を達成できたものとする。

3. 千葉明德高等学校

2022年度は、コロナ禍が3年目と続く中、難しい学校運営を余儀なくされたが、教職員の工夫と努力で、生徒募集や大学合格実績等で大きな成果を出すことができた。

2022年度の新入生は、389名、11クラス体制のスタートとなった。これまで進めてきた進学校化にむけて、新学習指導要領への移行を踏まえ、「思考する学び」の進化を教育目標に掲げて教育活動を進めてきた。

その成果として、2023年度入試の大学合格実績における国公立大学の現役合格者数が過去最多の13名となり、特に千葉大学への合格者数は7名と、併せて過去最多の合格者数となった。これまで進めてきた進学校化という方針がいよいよ形として現れてきている。この結果は、今後の生徒募集へも大きな弾みになっていくと考えられる。

(1) 教育活動の取り組み

①高校では、2022年度入学生より新教育課程がスタートし、各教科や総合で「探究」が導入され、また「観点別評価」の実施が始まった。今後、学年進行で新教育課程が進んでいくが、各教科や総合については、「探究・ICT・教育課程委員会」を中心に、探究活動における本校独自の「思考する学び」の方向性を検討して進めてきた。ICT機器の活用も踏まえて、2022年度の取り組みが、今後の方向性を示すものとする事ができた。

②大学入試への対応として、2022年度に立ち上げた「大学進学指導会議」での

検討を踏まえて、これまでの経験やデータを活かし、また進路学習指導部に配置した学習支援チューター(元予備校職員)の役割も最大限に生かした指導を行った。2022年度は、最新の情報とデータをもとにした教員同士の情報交換や、受験生への講演・面談・アドバイス等を積極的に行ったことの効果は大きかった。

③一人一台iPadを持つての教育の展開も6年目となった。ICT環境を整えたことにより、コロナ禍にあっても生徒の学びを止めることなく、即時に時間割に沿ったオンライン授業を展開することができた。

④コロナ禍の中で、以下の行事等が変更、縮小を余儀なくされた。

ア. 高2の海外研修旅行→国内へ変更

イ. 語学研修プログラム セブ島短期語学研修→中止

ウ. 各種学校行事(文化祭→縮小での開催とした。体育祭→短時間に変更。)

※2022年度は2021年度と比べ、コロナ禍で行うことのできなかつた活動も少しずつ行えるようにはなってきた。しかし、これまで学校として培ってきた様々な行事等の経験や伝統もコロナ禍の3年間で崩れてしまっている。

今後は以前よりもより良いものになるよう立て直していくことが課題である。

(2) 進路指導について

2022年度卒業生292名の進路は以下の通りである。

	男子	女子	合計	比率
国公立4年制大学	9	3	12	4.1%
私立4年制大学	137	80	217	74.3%
短期大学	5	5	10	3.4%
各種専門学校	13	19	32	11.0%
その他(浪人・留学等)	16	5	21	7.2%
総合計	180	112	292	100.0%

【主要大学の合格実績】(浪人含む)

千葉大学7名、岩手大学2名、信州大学1名、滋賀大学1名、佐賀大学1名、都留文科大学1名、早稲田大学1名、上智大学5名、東京理科大学6名、明治大学6名、青山学院大学1名、立教大学2名、中央大学5名、法政大学7名、学習院大学1名、立命館大学1名、東京女子医科大学1名、成蹊大学3名、成城大学2名、武蔵大学4名、明治学院大学2名、獨協大学12名、國學院大学2名、日本大学46名、東洋大学33名、駒澤大学4名、専修大学20名、共立女子大学4名、工学院大学2名、芝浦工業大学1名、東京電機大学4名、神田外語大学6名、順天堂大学5名、千葉工業大学152名、東邦大学15名、

立命館アジア大学 1名

- ① 2023年度入試は、大学入試改革3年目だった。昨年度の経験やデータを活かし、最新の入試情報を入手しながら進路指導に取り組んだ。その結果、大学進学率は過去最高の78.4%に達し、多くの生徒が希望の進路先へと進んだ。特に千葉大学においては、特別進学コースを中心に7名の生徒が受験し、7名全員が合格という結果となった。
- ② 近年の進路先の特徴として、海外の大学への進学者が増えている。今年もアメリカ3名、イギリス1名、マレーシア1名、計5名の進学を予定している。中には、アメリカ・フォーダム大学の合格者や、オーストラリア・メルボルン大学の合格者（既卒生）が出ており、今後も海外の進学を検討する生徒が増えていくと予想される。
- ③ 昨今の報道でもある通り、年内入試（総合型選抜・学校推薦型選抜）における定員枠の拡大が続いており、本校においても、早稲田大学や中央大学の年内入試で合格者が出ている。今後も入試の多様化・複雑化が進むことが予想され、低学年次からの進路指導・キャリア教育の徹底を進めている。

(3) 部活動と特別活動について

アスリート進学コースを中心とする部活動の主な成績は以下の通りである。

チアリーディング部	関東チアリーディング選手権 Division 1	優勝
	Division 2	優勝
	JAPAN CUP 2022 Division 1	5位
	Division 2	3位
	全日本高等学校選手権 Division 1	3位
	Division 2	準優勝
硬式野球部	全国高校野球選手権 千葉大会	4回戦敗退
サッカー部男子	関東高等学校体育大会千葉県予選	ベスト8
	千葉県高等学校総合体育大会	ベスト16
	全国高校サッカー選手権大会千葉県大会千葉県高等学校	ベスト16
硬式テニス	千葉県高等学校総合体育大会	男子シングルス ベスト16
		男子ダブルス ベスト16
柔道部	関東高等学校柔道大会（団体）	出場
	千葉県高等学校総合体育大会（団体部）	ベスト8
	千葉県高等学校総合体育大会（個人）	3位
水泳部	千葉県高等学校総合体育大会（競泳競技）	男子総合8位

	千葉県高等学校新人体育大会 競泳競技	女子総合3位 男子総合4位 女子総合3位
剣道部	千葉県高校剣道総体団体 千葉県私立高校剣道大会団体	女子ベスト8 女子ベスト8
バスケットボール部	関東高校バスケットボール選手権大会千葉県予選会 第76回千葉県高等学校総合体育大会バスケットボール大会	ベスト16 ベスト16
バドミントン部	関東高等学校バドミントン大会千葉県予選会 千葉県総合体育大会	女子団体ベスト4 (関東大会出場) 男子団体ベスト8 女子団体ベスト4 女子シングルス5位
サッカー部女子	千葉県高等学校総合体育大会	ベスト8

部活動については、コロナ禍の中で、運動系・文化系多くの大会や発表会が制限のある中開催されることになった。こうした中で、無観客の大会が多く、保護者からは我が子の雄姿を見ることが出来なかった保護者が多く、残念な思いであったと聞いている。また、部活動の活動自体も大きく制限されていた中で生徒は出来る範囲で精一杯努力し、数々の成績を残した。

(4) 生徒募集の取り組み

2023年度は入学者394名と、2022年度同様、予想を超える多くの入学者を迎えることとなった。生徒募集基準は、優遇条件を絞り込むなど、実質的に1ポイント引き上げたが、志願者数は145名増加し、懸念された1ポイント引き上げの影響は感じられなかった。公立高校が1回入試となり、二極化傾向が更に顕著となっていく中で、併願パターンが大きく変化し、公立の中堅～上位校との併願者が増加していることで歩留まりも上昇傾向にある。志願者増加の要因は、進学実績などの成果を評価されてのものだと考えるが、入試広報面ではコロナ禍の中でも実参加にこだわった募集イベントが実施できたことが大きく、参加者はコロナ前を上回り増加傾向にあった。

4. 千葉明德中学校

2022年度、千葉明德中学校・中高一貫コースは開校から12年目となり、進学校化にむけて「思考する学び」を中心に学校づくりを推進してきた。開校以来10年余りが経過する中で、本校ならびに中高一貫コースに対する評価も定着しつつあり、入学志願者数・入学者数も順調に伸ばしてきた。2023年度入試も受験者数を伸ばしたが、不合格者も多く出したことから、入学者は84名、3クラス体制となった。

2022年度で7期生までの卒業生を送り出す中、着実に大学合格実績を築いてき

た。特に総合学習や教科、学校行事等において、探究心やプレゼンテーション力を育成してきたことで、総合型選抜で上位の大学に合格を果たす生徒を多く輩出することができ、またこうした学力は、大学進学以降も大きな力となっている。このような取り組みの結果が、この数年の間で高く評価されるようになり、安定的な募集へと繋がっている。

(1) 教育活動と成果について

これまで中高一貫コースは、建学の精神に基づき、生徒ひとり一人の豊かな成長を目指し、教育目標である「行動する哲人」を具現化するために「思考する学び」の推進に取り組んできた。

本校では設立以来、大学入試改革や新学習指導要領の導入といった文科省レベルの教育改革に先立って、探究活動やICT教育、グローバル教育といった面において、独自の先進的な取り組みを進めてきた。具体的には、生徒ひとり一人が自らのiPadを活用することで、主体的・対話的な学びを推し進め、その成果をプレゼンテーションや課題研究論文を通じて発信する取り組みを行っている。こうした実践において、教員も絶えず移り変わる新しい情報を得ながら指導内容を改善している。

1・2年の「土と生命の学習」と3年の「課題研究論文」は、その内容をより進化させ、内容も充実したものとなった。「土と生命の学習」は、本校の探究活動の入り口として位置付けられ、ここで問いの設定や課題への取り組みについて基本的なことを学び、その延長線上に「課題研究論文」が位置付けられる。「課題研究論文」は、年々、そのレベルが高いものとなっている。

4・5年生での探究活動も定着し、ポスターセッションでの発表の取り組みも内容がより豊かなものになっている。特に千葉大等のプログラムにも積極的に参加する生徒も徐々に増え、本格的に研究に取り組む生徒も見られるようになった。こうした取り組みは、生徒の進路選択にも繋がり、総合型選抜での上位難関大学への合格を果たすケースが多々見受けられる。

6年生ではそれまでに養った学習や研究に対してのモチベーションによって、進路実現に邁進する段階と位置付けて進学指導に取り組んだ。

(2) 進路指導について

2022年度卒業の中高一貫コース7期生は人数がこれまでで最も少なく26名だった。その卒業生の主な大学の合格実績は以下の通りである。

信州大学1名、中央大学1名、成蹊大学1名、明治学院大学1名、日本大学2名、東洋大学1名、専修大学1名、東京農業大学2名、順天堂大学1名、近畿大学3名、千葉工業大学13名、東邦大学1名、東京医療福祉大学1名、亀田医療大学1名 他

※中高一貫コースでは、探究活動を通して培ったプレゼンテーション力によっ

て、総合型選抜入試（プレゼンテーション入試）において難関大学の合格を果たす生徒が増える傾向にある。今年度は、中央大、東洋大等に総合型選抜で合格した。

（３）生徒募集の取り組み

２０２３年度入試も、これまでの募集体制を維持しつつ、学校説明会や模試での説明会などを実施してきた。コロナの影響も徐々に和らぎ、学校説明会や体験授業等の参加者も例年になく多かった。

学校説明会では、本校の教育の特長を積極的にアピールするために、生徒のプレゼンテーションやインタビュー等、生徒の活動を積極的にアピールすることを中心に展開してきた。とくに iPad 等の ICT 機器を活用した発表や英語によるスピーチ等を全面に打ち出し、生徒の学習状況をお見せした。

適性検査型入試を中心に、本校の教育における特長である「思考力」について問う問題を積極的に取り入れ、広くアピールした結果、適性検査型入試では、市川会場を含めて過去最高の受験者数を集めることができ、本校入試への関心の広がりがうかがえた。

以上の取り組みによって、２０２３年度入試は、受験者数４６５名、入学者数８４名という結果に繋がった。前年度（受験者数３４５名、入学生数９１名）と比較して受験者数は大幅に増加したが合格水準を上げたこともあり、結果的に８４名の入学となった。

（４）その他の取り組みとその成果

- ①本校は他校に先駆けて、全生徒が iPad を持つようになってから丸６年目となる。これまで様々な教育プラットフォームを導入し、これらが生徒・教員間で定着したものとなっている。これからは、リアルとオンラインのハイブリッド型の利用や、より積極的なデータ活用等、もう一段階上の活用を手掛けていくことが求められる。
- ②文科省が進める MEXCBT（国や地方自治体による公的 CBT システム）やデジタル教科書の学校現場での導入はより本格的なものとなっている。２０２２年度は、本校もその導入にむけての準備に取り組んだ。今後、公教育の場でも CBT 化が進むと予想され、本校としても環境整備をしていかなければならない。
- ③ ICT 機器の利用の充実に伴ってハード面でもより充実した環境整備を行ってきた。機器の進化にともない、機器の更新は欠かすことができない。今後、予算面を含めて、これらへの対応が求められる。
- ④ ICT 化に加えて、「思考する学び」の空間づくりを進めてきた。今後、特に図書・視聴覚室の有効利用や書籍や資料等を有機的に活用するための環境整備が求められる。

5. 認定こども園千葉明德短期大学附属幼稚園

(1) 運営方針、教育・保育の重点施策に対する成果について

これまでと同様に2022年度においても、豊かな自然に囲まれた園環境の中で、遊びや生活を通して子どもたちが自らの意志で学び、育つという本園の保育理念とそれに基づく保育実践は変わることなく受け継がれている。昨今重要視されている「資質、能力」という括りの中にある知識や技能、思考力、判断力、表現力、人間性等の育ちは、本園における「遊び」にその多くが内包される。

2022年度において、5年目を迎えた山園舎の未満児クラスの保育はこれまでの積み重ねを土台としながら、着実に進歩している。毎年変わる子どもの姿に柔軟な対応ができる保育の多様性、組織力を備えつつあり、短大の教育顧問と連携を図りながら、職員間の共通理解のもと、次年度に繋がる確固とした体制作りを引き続き求めていく。

3歳以上児クラスの森園舎においては、恵まれた園庭環境を如何に有効に使うか、遊びと環境双方の関連性、安全性に対する職員間の共通理解が改めて求められており次年度への課題が浮き彫りとなった。新たな遊具エルシを導入したが、モノを変えたことだけに止まらない、理論と実践を踏まえた園舎内外の保育の充実には時間を要するが、多方面からの協力を仰ぎながら引き続き進歩を求めていく。

また、表現活動においては、年長児において手話合唱を取り入れ、一部の園児がプロの音楽家と共に舞台に立つ経験をした。所謂、子どもの歌だけではない、幅広い芸術の一端に触れる機会となった。子どもの感性の中にある境界線のない創造性を引き出すには、まず保育者がその楽しさ、価値に気づき、新たな取り組みを受け入れる柔軟性をもたなければならない。今後もこのような場を継続的に設定する必要性を感じている。

(2) 募集活動に対する成果について

2023年度募集については前年度の募集活動を踏襲した上で、教育方針を少人数制で丁寧に説明する園見学会を多数設定しホームページ内の「おうちえん」等による園生活の発信を効果的に行った他、前年度3歳1号園児の獲得に貢献したひよこ組の定員数を24名から36名に拡充して入園児数増を図った。

2号園児に対する需要の増大からか、前年度ほどひよこ組からの入園率は振るわず、2023年度3歳1号園児の入園児数は63名となったが、総園児数においては293名と前年度を上回る園児数となっている。

これは4歳児1号園児が、定員である80名を超過したことが大きな要因であり、年度途中や4歳児進級時に転園を検討する保護者に対する募集活動の成果といえる。3歳児の入園児数減少と総園児数の増加に至る要因を精査し、今後の募集活動の改善と園児数の安定化へ繋げたい。

(3) 新たに実施した取り組みとその成果について

I C T関連として、預かり保育内において端末を保育者の指導の下で子どもたちが活用し、子どもたちによる自発的な活動が盛んに行われた。その写真や動画は随時、ドキュメンテーションや上映会の形で、職員間で共有された。

その他、短期大学教員による「あそぼうか〜プロジェクト」との連携は年々その内容が充実してきており、日中の保育からの繋がりを生かした多彩な活動を行っている。

ここ数年で短期大学と附属幼稚園の連携は多様に展開されているが、今後さらに、ゼミ単位のような少人数の学生による交流等を積極的に行い、副次的効果として、附属幼稚園への、ひいては系列園を含めた千葉明德学園への就職希望にも繋がるよう期待する。

(4) 園児数の動向等

千葉市内も例外なく園児数が減少している中、本園は2022年度も一定の成果を残すことが出来た。

実際に園に足を運んでいただくことで、その広さだけでなく変化に富んだ環境を知っていただく機会となる園庭開放や園見学会、その他、入園説明会等における職員の懇切丁寧な対応が数字に表れたと推察している。

本園への通園範囲における出生数減少に備えて、園庭開放の回数を増やす等、学園組織にある本園ならではの魅力を、SNS他で多角的に発信していく。

【月別在籍数】

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
在籍数	282	282	283	283	280	284	283	285	284	284	284	284

【年齢別在籍数/3月】

年齢	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児
在籍数	14	15	93	87	75

【職員構成/3月】

職種	園長	副園長	主幹	保育教諭	保育教諭 (パート)	栄養士	調理員 (パート)	看護師 (パート)	職員 (パート)	事務
人数	1	1	2	17	12	1	2	1	2	1

6. 明德本八幡駅保育園

(1) 保育園運営方針に関する成果について

待機児が0となった市川市ではあるが、本園以外にも、0歳児の定員に満たない

保育園があり、例年以上に市川市役所と速やかな連携を取って、月々の募集において減少を補うよう定員数の充足に努めた。外国籍の児童がコロナ感染状況緩和により帰国し、そのまま日本へ戻らないというこれまでにない要因で園児の増減があった。

幼児クラス増設に向けた方向性が打ち出され、それに向けた取り組みが開始となった。幼児クラス設営のため、保護者の都合に合わせて説明会を開催し、ほぼ全員にご参加頂き、学園の理念を踏まえた理事長の講話、質疑応答により疑問や不安を解消することができた。2023年4月に向け職員会議において今後の保育動向の検討を重ねた。

補助金交付対象である特別保育事業は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止対策の観点から、1回に2家庭までの受け入れとし、状況を見ながら実施してきた。

一時預かり事業は、毎日の健康状態の把握が難しいこと、改築工事により開催場所の確保が難しいこともあり、今年度も受け入れは行わなかった。

(2) 保育目標と成果について

コロナ禍3年目を迎え、地域性も要因となって定員に満たない年度開始となったが、各年齢ともに、保育の方向性、小人数体制の利点を再確認し、幼児クラス増設に向け、新たな計画へ幅を広げることに努めた。

①昨年度同様、毎日行っていたミーティングを一日おきとし、小グループにおける打ち合わせの時間を捻出してパート職員との打ち合わせを深めた。そのことにより、正規のみならずパート職員の意見もたくさん聞かれるようになった。保育を組み立てる上でいい取り組みとなった。

②幼児クラス増設に向けて理事長案内のもと“学園の森ツアー”と称して学園第2グラウンド用地を数日間にわたって視察した。今後の構想に繋げる第一歩として、職員が自己研修として参加した。実際に目にした自然を、本園で取り入れる方法を考え、イメージ化することができ、その後の保育にも繋がり成果が見られた。

(3) 募集活動と成果について

①新型コロナウイルス感染症感染拡大防止対策の一環から、地域子育て支援「ぼっぷスマイル」は小規模で開催せざるをえなかったため、園児募集においては保育園見学を重視し、午前、午後の時間帯を設定した上で実施し、保育の内容を周知した。その結果、入園に繋げることができた。

②重要な施策である地域子育て支援事業「ぼっぷスマイル」を継続するために、次年度は角度を変えて取り組み方を考えていく発想の転換を要す。

(4) 新たに実施した取り組みとその成果について

園庭がない保育園の公園使用率が高く、密度の高さから安全性が心配な声を市

役所保育運営課に申し出たところ、産業会館の使用提案をいただいた。今後の使用方法について会館の職員に話を聞き、子どもたちの活動の場を広げるベース作りを行った。

(5) 園児数の動向等

【月別在籍数】

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
在籍数	38	40	39	40	40	41	41	42	42	44	44	44

【年齢別在籍数/3月】

年齢	0歳児	1歳児	2歳児
在籍数	12	18	14

【職員構成/3月】

職 種	園 長	主 任	副主任	主任看護師	保育士	栄養士
人 数	1	1	1	1	5	1
職 種	パート(常)調理師	パート(非)調理員	パート(常)保育士	パート(非)保育士		
人 数	2	1	8	2		

(6) その他

- ①新型コロナウイルス感染症感染拡大防止対策の取り組みに重点を置き保育運営
 努め、大きな休園措置に至る状況はなく過ごせた。保護者のマスク着用も、厚労
 省の通知通りとし、2023年4月から職員はマスクをせずに保育を行う。
- ②改築工事を進める中、以前JRが行った工事に不具合があったことがわかり、工
 期が延びることになった。保護者にはJR、学園から通知文を出し、不安な声や
 質問は出ていない。

(7) 苦情（解決）について

苦情は特段無かった。

7. 明德浜野駅保育園

(1) 保育園運営に対する成果について

園児数については、39名でスタートし、園児推移は下記に示すように年間を通
 して定員を充足している。入園希望が多く、千葉市幼保運営課より、次年度以降に
 向けて定員変更を検討してほしい旨の依頼があった。今後の検討課題としていく。

(2) 保育目標と成果について

今年度も保育参加や懇談会等の保護者行事を実施することはできなかったが、本
 園の特性と学園の環境を活かして、昨年度と同様に「おたのしみ会」「秋の遠足」そ

して「卒園遠足」と「卒園式」を実施し、子ども達の成長発達に欠かすことのできな
い経験を通して、進級・進学にむけての意識向上に良い結果を生むことができた。保
護者にも保育の可視化を積極的に行い更なる信頼関係の構築に繋げることができた。

栄養士及び調理師の途中退職により、主任保育士（調理師免許保有）が暫く調理に
入る期間があったが、9月には職員が揃い、給食室が新たにスタートした。保育園給
食に前向きに取り組み、子ども達の状況に合わせながらのメニュー作りや、クッキン
グ保育など、食育活動にも力を入れることができた。

コロナ禍でも感染者が無く昨年度まで経過していたが、今年度7～10月に数名
の罹患者があった。その後、新型コロナウイルスやインフルエンザの感染者はなかつ
た。3月中旬に園児の下痢症状から始まり、園児・職員合わせて19名が嘔吐・下痢
を発症し、保健所への届け出を行なった。（後日原因はノロウイルスによる感染症と
判明）連日保健所への報告作業及び消毒を実施し、10日間程度で終息して通常の保
育に戻った。

（3）募集活動と成果について

今年度においても、コロナ禍で見学者を園内に入れることが難しい状況であつ
たため、できるだけ土曜日の見学にご協力いただき、ゆっくり園内を案内したり、
説明や質問を受けたりできるよう工夫していった。その際、丁寧な対応を心がけて
きたこともあり、2023年度は4月当初より定員を充足する見込みである。

（4）新たに行った取り組み等とその成果について

①保育の発信について

通常実施している【今日の出来事】の他に、フォトフレームを使用して、保
育中の様子のスライドショーを作成した。お迎えの際に、保護者が玄関でお子
さんを待っている間に、保育への理解を深められるような工夫をしていった。

②他園との詳細な情報交換について

他園に在園していた園児の受け入れに伴い、拘り等がある様子が伺えたの
で、在園していた保育所と連絡を取り合い、詳細な引き継ぎを実施した。ま
た、児童相談所が関わるケースでも、兄弟が在園している保育所との情報交換
を密にして、保護者対応及び児相への対応をしていった。

（5）その他

経年劣化に対する修繕等について

開園して13年が経過し、電化製品・水回り・内装等に劣化がみられたため、
修繕を実施することが増えてきている。エアコンにエラー表示が出る・床のワッ
クスが薄れる等の現象が起きたため、急遽エアコンの分解洗浄やワックスがけを
実施し、保育をする上で快適な生活環境を維持できるよう努めた。

(6) 園児数の動向等

【月別在籍数】

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
在籍数	39	39	40	40	40	40	40	40	41	41	41	41

【年齢別在籍数/3月】

年齢	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児
在席数	7	8	6	6	8	6

【職員構成/3月】

職種	園長	主任	副主任	保育士	栄養士	看護師	調理員	保育補助
人数	1	1	1	10	1	1	2	1

(7) 苦情（解決）について

苦情は特段無かった。

8. 明德やちまたこども園

(1) 運営方針に対する成果について

- ①子どもの「発達を支える営み」としての保育・教育の在り方を、保育教諭はじめ職員一人ひとりが丁寧に子どもに関わり、その子を理解していくことを心掛け取り組んできた。この真摯な取り組みの姿が日常的な姿となってきた。
- ②子どもがのびのびと身体を動かして遊べる環境を、子どもと共に創ることや、年齢によっては保育者が遊びを発展させたり深めたりするよう働きかけたことで、特に乳児庭について、少しずつ遊びの環境を充実させることが出来た。
- ③コロナ禍であったが、安全に配慮しながらできうる限り子どもたちの生活の質を下げない様に務めた。
- ④地域の方々のご好意でタケノコ堀、サツマイモ栽培、ニンジンの収穫、トウモロコシやスイカなど八街の四季の農産物との関りが、子どもたちへの食育の大きな力となった。

(2) 教育目標などに対する成果について

教育目標をより具体的に日々の保育・教育に反映できるように、学級経営案を3期に分けて計画、実践・考察、反省・課題、実践をベースに子どもの実態を見つめ直したことで、意識して教育目標を踏まえた保育実践が進んでいると考える。

(3) 募集活動に対する成果について

- ①一時保育等子育て支援活動に参加した子どもの入園がここ数年、一定数ある。
園の保育の姿や、自分の子どもと遊んでくれたり可愛がってくれたりする在園

児の姿を見て、入園に繋がっていると感じる。保護者間の口コミが入園に繋がっている。

②ホームページで日々の園児の生活の姿をスナップやコメントで伝えている「園日記」の既読数が1日約300件以上あり募集にも大きな力になっていると思われる。

(4) 新たに行った取り組みについて

園庭環境の見直しを図った。園舎の新築を見据えて、園庭デザインし、遊具の配置、子どもの遊びの動線、現在設置してある大型遊具などの安全性を見極め、2023年度の大型遊具新規設置を計画した。2023年8月ごろに設置予定。

(5) 園児数の動向等

【月別在籍数】

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
在籍数	76	78	78	78	78	79	79	81	81	81	81	81

【年齢別在籍数/3月】

年齢	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児
在席数	6	8	12	19	17	19

【職員構成/3月】

職種	園長	主幹保育教諭	指導保育教諭	保育教諭	栄養士
人数	1	1	2	19	1
職種	看護師	調理師	事務	用務	
人数	1	1	1	1	

(6) 苦情（解決）について

苦情は特段無かった。

Ⅲ. 財務の概要

1. 事業活動収支の推移

(単位：千円)

		科目/年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	
		教育活動収支	収事業の活動	学生生徒等納付金	996,790	984,995	1,015,660
手数料	29,631			28,231	29,703	32,714	
寄付金	11,453			14,250	12,997	14,168	
経常費等補助金	1,181,173			1,238,727	1,206,747	1,242,367	
付随事業収入	141,570			102,230	76,893	75,459	
雑収入	82,413			43,745	71,637	61,110	
教育活動収入計	2,443,030			2,412,179	2,413,636	2,492,989	
支事業の活動	人件費		1,635,553	1,629,616	1,649,141	1,697,259	
	教育研究経費		472,923	425,892	444,604	570,863	
	管理経費		259,338	228,759	223,570	201,946	
	徴収不能額等		0	381	39	0	
	教育活動支出計		2,367,814	2,284,648	2,317,354	2,470,068	
教育活動収支差額				75,216	127,531	96,282	22,920
教育活動外収支	事業活動収入の部		受取利息配当金	515	515	509	385
		教育活動外収入計	515	515	509	385	
	事業活動支出の部	借入金等利息	18,367	17,653	16,094	13,270	
		教育活動外支出計	18,367	17,653	16,094	13,270	
	教育活動外収支差額			△17,852	△17,137	△15,585	△12,885
経常収支差額			57,346	110,393	80,697	10,035	
特別収支	収入の部	資産売却差額	0	0	0	0	
		その他の特別収入	11,733	14,196	15,461	93,078	
		特別収入計	11,733	14,196	15,461	93,078	
	支出の部	資産処分差額	9,251	186	5,539	16,409	
		その他の特別支出	16,000	13,672	0	0	
		特別支出計	25,251	13,858	5,539	16,409	
	特別収支差額			△13,518	338	9,922	76,669
[予備費]							
基本金組入前当年度収支差額			43,846	110,732	90,620	86,705	
基本金組入額合計			△46,844	△133,543	△69,311	△310,423	
当年度収支差額			△2,998	△22,811	21,308	△223,718	
前年度繰越収支差額			△4,046,005	△4,049,003	△4,071,814	△4,050,506	
基本金取崩額			0	0	0		
翌年度繰越収支差額			△4,049,003	△4,071,814	△4,050,506	△4,274,224	
事業活動収入計			2,455,279	2,426,890	2,429,607	2,586,452	
事業活動支出計			2,411,432	2,316,158	2,338,988	2,499,747	

(注) 金額は、各項目において千円未満を四捨五入して記載しており、合計額が一致しない場合もある。

2022年度決算は、事業活動収入25億8,645万2千円に対し、事業活動支出は、24億9,974万7千円となり、基本金組入前当年度収支差額は、8,670万5千円の

収入超過となった。（2012年度から11期連続での収入超過）また、当年度収支差額は、2億2,371万8千円の支出超過となった。

2. 施設・設備への投資額の推移

(単位：千円)

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
施設関係支出	208,589	267,613	135,826	380,298
設備関係支出	17,966	57,988	32,131	40,673
合計	226,555	325,601	167,957	420,971

2022年度の主な施設関係支出は、第二グラウンド用地として土地46,380.77㎡を購入、建物支出は、短期大学本館・2号館空調機器更新工事、短期大学学友会室及び倉庫設置、高等学校1号館南面外壁・アルミサッシ改修工事、ジェンダフリートイレの設置、中学校9教室・高等学校14教室の黒板をホワイトボードに張替、幼稚園遊戯室前戸外サンルーフ設置を行った。構築物支出は、バリアフリー化計画により学園本館前スロープ設置、短期大学横遊歩道設置、短期大学地下貯水槽地上化工事、高等学校ハンドボールコート人工芝張替工事、幼稚園園庭遊具設置、やちまたこども園乳幼児用外遊具設置を行った。建設仮勘定支出は、第2グラウンド購入に関わる申請業務や開発申請業務の経費を計上、次年度竣工予定の本八幡駅保育園園舎改修の令和4年度の施工費を計上した。

設備関係支出では、教育研究用機器備品として、短期大学・高等学校・中学校において各所プロジェクターの入替、中学校・高等学校のAppleTVの設置やAirDogの追加、高等学校理科授業用として水波投影装置・弦定常波実験器・実体顕微鏡システムを設置、体育館バレーボール支柱入替、幼稚園園児用中型箱積み木等を購入した。管理用備品では、各所事務用PCの入替や感染症対策として本八幡駅保育園では、かんたん除菌BOX設置、浜野駅保育園ではオゾン除菌脱臭装置入替を行った。ソフトウェアは、中学校高等学校において新しい校務支援システムの導入を行った。

図書支出については、全部門合わせて1,691冊の購入をし、図書館蔵書は総計68,643冊となった。

3. 借入金の推移

(単位：千円)

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
長期借入金	553,399	713,416	704,943	731,910
短期借入金	376,303	343,983	306,873	106,033
合計	929,702	1,057,399	1,011,816	837,943

(注) 各年度とも3月31日現在の残高を記載している。

長期借入金は、前期末残高7億494万3千円に対し、新規借入1億3,300万円、返済1億603万3千円を計上し、期末残高7億3,191万円となり、前年比2,696万7千円の増加となった。短期借入金のうち、運転資金借入は1億8,000万円、返済は3億9,000万円とし、前期末残2億1,000万円も合わせて返済を行った。

短期借入金については、毎年、約定通りに返済を行っているが、年度を超えての返済サイクルの借入が恒常的にあり、この残高を計画的に減少させてきたが、近年の好調な学生・生徒・園児募集とコロナ禍の支出減により資金留保されたため、これを返済原資とし、2022年度末、漸く、期末残高0円となった。これにより、短期借入金残は、返済期限が1年以内の長期借入金のみで計上となっている。長期及び短期の借入金残高の合計は、前年比1億7,387万円減少し、8億3,794万3千円となった。

